令和３年度
茨城大学
学生地域参画プロジェクト
活動報告書

茨城大学
Ibaraki University

令和３年度　学生地域参画プロジェクト報告書

□活動報告

・まなびの輪～大洗における多文化共生～　・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
代表者　　人文社会科学部３年　坂井 七帆

・地質情報活用プロジェクト　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
代表者　　理学部４年　山田 直輝

・FES(Food Education Supporter)～食育応援隊～　・・・・・・・・・・・・・・ 11
代表者　　農学部３年　柴田 咲季

・地域防災・活性化プロジェクト　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 15
代表者　　人文社会科学部３年　川上 藍

・SDGS カフェ ～地域とともに考えようひとりひとりのゴール～　・・・・・ 19
代表者　　人文社会科学専攻２年　小泉 準一

・あみ自然大好きプロジェクト～地域とつながり環境と未来を考える～　・・・ 22
代表者　　農学部３年　染谷 海

まなびの輪～大洗における多文化共生～

代表者：人文社会科学部現代社会学科　3 年　坂井 七帆

連携先

大洗町役場　まちづくり推進課

顧問教員

横溝 環（人文社会科学部・准教授）

参加者

安蒜 ひなた
（教育学部学校教育教員養成課程・4 年）
石川 美優
（人文社会科学部現代社会学科・3 年）
小林 雄太
（人文社会科学部現代社会学科・3 年）
西條 友博
（人文社会科学部現代社会学科・3 年）
坂井 七帆
（人文社会科学部現代社会学科・3 年）
笹川 絵奈
（人文社会科学部現代社会学科・3 年）
谷川 晴香
（人文社会科学部現代社会学科・3 年）
中島 菜摘
（人文社会科学部現代社会学科・3 年）
矢幅 彩花
（人文社会科学部現代社会学科・3 年）
関戸 恒世
（農学部地域総合農学科・2 年）
小川 倖歩
（人文社会科学部現代社会学科・2 年）
勝野 敦之
（人文社会科学部現代社会学科・2 年）
川名 朋美
（人文社会科学部現代社会学科・2 年）
塩谷 真希
（人文社会科学部現代社会学科・2 年）
髙﨑 健輔
（人文社会科学部現代社会学科・2 年）
武田 亜依
（人文社会科学部現代社会学科・2 年）
千葉 理緒
（人文社会科学部現代社会学科・2 年）
三次 翔太
（人文社会科学部現代社会学科・2 年）

プロジェクトの概要

●プロジェクトの背景

まなびの輪は、大洗町役場・大洗小学校・ボランティアの方々と連携し、大洗町在住外国人の方々の日本語コミュニケーション能力の向上および多文化共生のまちづくりの推進を目的として活動してきた。今年度はそれらに加え、コロナ禍において交流の機会が減少した大洗町を中心とする外国人の方々へコミュニケーションの場を提供することも目指し、大洗町役場・ボランティアの方々と連携し活動を進めてきた。

●プロジェクトの目的・内容

今年度の活動目的は「繋がる・続ける・伝える」である。具体的な内容は以下の通りである。

(1) **日本語教室**：大洗町を中心とした外国人の方々へ日本語学習の場を提供する

ことを目的とし実施した。

(2) **オンライン夏祭り**：イベントを通して教室全体での交流を促すことで、外国人同士および外国人と日本人の交流や情報の共有が可能なネットワークを創り出すことを目的とし実施した。

(3) **茨城海岸美化プロジェクト**：大洗町在住の外国人の方々と交流を深めながら、環境保全活動を通して地域に貢献することを目的とし参加した。

(4) **広報**:本活動の周知、参加者を募ること、大洗町住民と多文化共生の意識を共有することを目的とし行った。

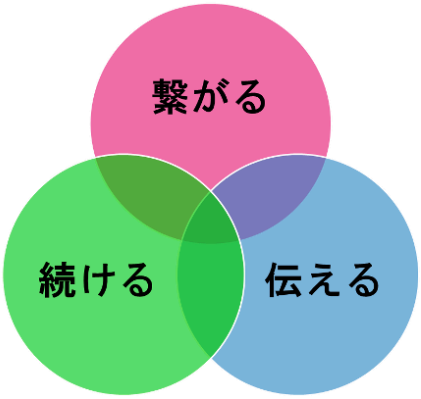

図１：今年度の活動目的

プロジェクトの成果報告

●プロジェクトの成果

(1) 日本語教室

日本語教室は、月に４回（第１・第３土曜日 21:00～22:30、第２・第４水曜日 20:00～21:30）に ZOOM を用いて開催している。外国人の方々のニーズや日本語のレベルをもとに複数クラス（15～18 クラス）を設けている。クラスの担当者は、教材の作成や予習などの事前準備を各自行っている。

この活動における成果の 1 点目として「関係の継続と学習者の増加」が挙げられる。前年度に引き続き、新型コロナウイルス感染拡大を防ぐため対面での実施はしなかったが、オンライン化によってコロナ禍以前から参加してくださっていた方々との関係を継続でき、さらに日本国内に限らず様々な地域から参加してくださる方が増加した。

2 点目に「情報伝達」が挙げられる。日本語教室の場を活用し、感染症に関することなど生活に必要な情報を外国人の方々に共有することができた。このような情報伝達は外国人の方々の生活における不安を軽減することに繋がったと考えられる。

3 点目に「日本語能力試験合格者の輩出」が挙げられる。日本語能力試験合格は、外国人の方々の自信に繋がるだけにとどまらず、仕事の進展に関わることである。そのため生活に直結する重要な意味を持つ。

4 点目に「楽しさの共有」が挙げられる。コロナ禍で不安や閉塞感のある中、人と繋がり、コミュニケーションを通して楽しさを共有できたことは、外国人の方々にとって大きな安心に繋がったと考えられる。

大洗町役場は、大洗町在住の外国人の方々を本活動に繋いでくださった。また外国人やボランティアの方々への教材の貸し出しをしていただくことで連携を図った。

図２：日本語教室全体の様子

図３：日本語教室のクラスの様子

（2）オンライン夏祭り

2021 年 8 月 28 日（土）20:00〜22:00 にオンライン夏祭りを実施した。この活動では、約 30 名の外国人の方々が 3 分ほどの動画を用意してくださり、それらをクラスの枠を超えて日本語教室のメンバー全員で視聴しながら交流した。動画の間には、担当ボランティアからのコメントやミニゲームを挟んだ。

この活動における成果の 1 点目として「異文化理解・相互理解」が挙げられる。動画を通して、町の様子や母国料理、地域のルールの紹介、歌や演奏などを皆で楽しむとともに、異文化理解を深めることができた。中には凝った編集が加えられたものなどもあり、普段は見えない外国人の方々の一面をお互いに知ることができた。

さらに、外国人の方々の「自己表現の場」としても機能したことが 2 点目の成果として挙げられる。

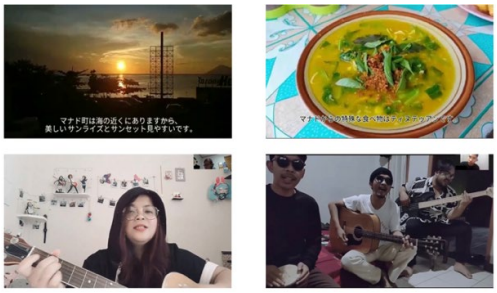

図４：外国人学習者による動画発表

このイベントでは参加者全員で一体感を感じることができた。

図５：「緑のもの」を持ってくる
ミニゲームの様子

（3）茨城海岸美化プロジェクトへの参加

2021 年 11 月 3 日（水）に国際ロータリークラブ主催の茨城海岸美化プロジェクトに参加し、大洗サンビーチにて大洗町在住の外国人の方々と共に海岸の清掃を行った。これまではオンラインでしか関わることのできなかった外国人の方々と大洗町で直接会えたことは非常に喜ばしいものであった。

この活動における成果として「活動の周知」が挙げられる。まなびの輪として参加することで、本活動の存在を大洗町の方々に知ってもらうことができた。さらに外国人の方々が地域の一員として町に貢献していることをアピールすることにも繋がった。何よりも、大洗町の美しさに触れながら皆で交流できたことは心に残った。

図６：清掃の様子①

図７：清掃の様子②

（4）広報

広報については①SNS を用いた情報発信（Facebook・Twitter・Instagram）、②クリアファイルの作成（2022 年 1 月～3 月）を行った。①の成果は、SNS により参加者との情報共有、活動の周知ができたことである。②については「大洗町宣伝用ファイル」を作成した。ファイルのデザインには、新規ボランティア・学習者の募集、活動の周知となる情報を盛り込んだ。このファイルは大洗町役場で、国際交流協会の会員および町民の方々に配布していただいた。

これにより、新たな参加者との繋がりの創出や大洗町住民との多文化共生の意識の共有を目指す。

図８：大洗町宣伝用ファイル

●今後の課題・展望

現在、日本語指導ボランティアの多くは大洗町以外に在住しているため、非常時や子どもの教育における助け合いといった身近なところでのサポートが難しい。そこで、今後の課題として大洗町在住の日本語指導ボランティアの拡充が挙げられる。そのために日本語指導ボランティア養成講座を開講する必要がある。また、日本語教室のボランティア間の情報共有は現在日誌を通して行っているが、適宜ミーティングを開くなどしてさらに強化を図っていきたい。そして、新型コロナウイルスが収束した暁には大洗小学校での取り出し授業の支援を再開させ、外国にルーツを持つ子どもの教科学習や日本語学習のサポートを行いたい。加えて、計画的に広報物の作成を行い、活動の周知および町民の多文化理解推進に取り組んでいきたい。

今年度は新型コロナウイルスの拡大を懸念し、対面での活動を思うように実行できなかった。今後は実際に大洗町へ足を運ぶことで町を深く理解し、多文化共生のまちづくりのために自分たちにできることをさらに見つけていきたい。これからも参加者の方々との繋がりを大切にしながら活動に励んでいきたいと考えている。

地質情報活用プロジェクト

代表者：理学部 理学科　4 年　山田　直輝

連携先

茨城県北ジオパーク推進協議会事務局
（株）東京地図研究社

顧問教員

小荒井　衛（理学部　教授）

参加者

城戸口 和希（理工学研究科 理学専攻 博士前期課程 2 年）
佐藤 未笛（理工学研究科 理学専攻 博士前期課程　1 年）
小林 香澄（理工学研究科 理学専攻 博士前期課程　1 年）
横路 友翼（理工学研究科 理学専攻 博士前期課程　1 年）
河又 みさき　（理学部 理学科 4 年）
山田 直輝　（理学部 理学科 4 年）
渡辺 詩織　（理学部 理学科 4 年）
小川 美宇　（理学部 理学科 3 年）
栗原 佳宏　（理学部 理学科 3 年）
田中 美紗　（理学部 理学科 3 年）
長友 大輝　（理学部 理学科 3 年）
古庄 航輝　（理学部 理学科 2 年）
石見 優太　（理学部 理学科 1 年）
仲村 麻衣　（理学部 理学科 1 年）
杉本 海渡　（理学部 理学科 1 年）

プロジェクトの概要

●プロジェクトのテーマ

本プロジェクトは、「地球科学×地域振興」をテーマに活動を行う。両者を結びつけるのが、ユネスコの正式事業である「ユネスコ世界ジオパーク」（以下「ジオパーク」）の理念と考える。ジオパークは、地球科学的な重要性のみならず、地域の地理・生態・歴史・文化などを組み合わせ、その保護・教育・持続的な開発が一体となった観点から地質遺産を扱うことが必要とされる。そうした中で、自然と人間の共生および持続可能な開発を実現していくことが求められる。私たちはこの理念に共感し、近年持続可能な地域社会づくりの重要性が叫ばれる茨城においてもジオパークの考えをもとに地域に貢献できないかと考えた。

そのため、本プロジェクトも地球科学に固執せず、近年深刻化している自然災害の被害に対する防災や日本の中等教育において軽視されがちな地学教育、COVID-19 の影響で冷え込んでいる観光業界など関連する幅広い問題について学生らしさを活かして活動に取り組むことに意義があると考える。

●プロジェクトの目的

本プロジェクトでは、「地球科学を一般の方々に身近に感じてもらう」ことを活動目的に掲げる。これは、地球科学が地域の地質・地形など身近に存在しているのにも関わらず、どこか専門的で一般

の方々には縁遠いものと思われがちであるためである。そのために、地域でジオパーク活動を行っている茨城県北ジオパーク推進協議会と連携を密にし、構成員である茨城県北地域の各市町村などとの繋がりを深め、地域の方々が地球科学をわかりやすく楽しく学べるような取り組みを行っていく。そして、そうした取り組みを通して茨城県北地域の地域活性化に貢献することを最終目標とする。

●連携の内容・活動日程

・茨城県北ジオパーク推進協議会事務局

ジオサイトマップ・ハイキングコースマップの製作にあたっては、地質・施設情報の提供やデザイン・内容のアドバイス（一般人・登山者向けを意識）をしていただいた。また、各マップの内容確認のための協議会の構成員である地元の各市町村との打ち合わせや断層形成実験の出前授業を行った小学校との連絡の仲立ちをしていただいた。

・（株）東京地図研究社

本年度製作した日立ジオサイトマップ・五浦海岸ジオサイトマップ・常陸太田ジオサイトマップの地図情報を作成していただいた。

・活動日程

定期活動は週 1 回（前期：金曜日 5 限後期：水曜日 5 限）の会議を行い、事務連絡や各々の進捗具合・課題とその解決法について話し合った。それ以外は、本プロジェクトの企画ごとに班分けを行い、各自で作業・調査を行った。

プロジェクトの成果報告

●ジオサイトマップの改訂

本プロジェクトでは、これまで茨城県北ジオパーク内のジオサイト（ジオパークの見どころ）を紹介するパンフレット『ジオサイトマップ』（以下、マップ）を作成し、地域でのジオパーク活動に活用していただいていた。しかし、地図の地形が読み取りにくいことや、制作から 5 年以上が経過したことから情報が古くなっていることなどの問題点が生じた。そこで、現在の情報に合わせた内容の修正や地図をより地形の読み取りやすい（株）東京地図研究社制作の多重光源陰影段彩図 ™ に差し替える作業を行った。昨年度はまず五浦海岸、日立の 2 地域を対象に従来のマップの改訂作業を行った。

本年度は一通り作業を終了した五浦海岸・日立地域については実際に印刷するにあたり外部からの評価・確認をいただき修正作業等を行った。また、昨年度 COVID-19 の影響により延期となった常陸太田地域の調査・改訂作業を本格的に行った。なお、昨年度から予定していた常陸大宮地域のマップ改訂については、COVID-19 の影響や印刷費用の関係上再度延期となった。

まず、五浦海岸ジオサイトマップについては、顧問の小荒井教授の協力のもと大学入門ゼミに参加する理学部の地学を専攻する新入生 45 人を対象に従来のマップと改訂後のマップを比較参照し、実際に現地を訪れて使用した上でアンケート調査を行った。対象とした新入生は地球科学に興味を持っているが、専門的な知識はマップを使用する一般の方々と同様あまり持っていないと想定される。図 1 は、今回の改訂の主

旨である地図の見やすさについて 4 段階評価で回答を得たものである。この図から、地図がより見やすくなったという好意的な意見が多いことがわかる。また、見やすくなったとは思わないという意見の中には、今回地形を表現するために用いた地図の陰影の主張が強すぎるという声もあった。これは、制作された元の地図を拡大し掲載範囲を狭めたため、主に標高の高い部分で解像度が悪くなってしまっていることが原因として考えられる。図 2 には、北茨城市と行った打ち合わせの様子を示す。打ち合わせは終始和やかな雰囲気で進み、今後もジオサイトマップの活用などにおいて互いに連携を続けていくことを確認した。図 3 には、アンケートや北茨城市との打ち合わせを踏まえて修正したマップを示す。修正版では、地図の範囲を広げ最寄り駅の位置を示したり、施設入場料を明記したりして、より観光での使用に便利なマップに仕上げた。

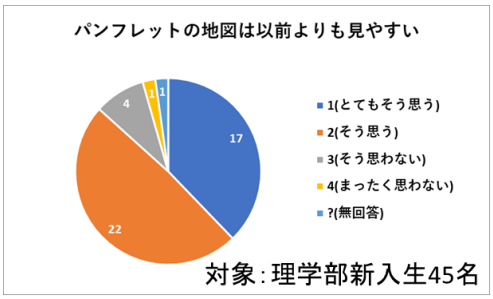

図 1：五浦海岸ジオサイトマップについてのアンケート調査結果（一部）

図 2：北茨城市との打ち合わせの様子

図 2：五浦海岸ジオサイトマップ
・マップ面（修正・最終版）

日立ジオサイトマップについては、日立の地質に詳しい日立市郷土博物館特別専門員であり、茨城大学名誉教授の田切美智雄先生の確認をいただいた。先生からは裏の解説面に掲載する図や写真の提供や、主に地質・地形に関する専門的な内容についての確認をいただいた。図 3 は、新たに新設されたトイレの位置情報や一部漢字の振り仮名などを加えた修正版のマップを示す。このマップは、作成前に地域の主にジオパークのインタープリター（大地の案内人）の方々に対して行ったアンケート調査を踏まえ、近年パワースポットとして人気がある御岩神社と日本最古の地層との関係について新たに加えている。

図 3：日立ジオサイトマップ
・マップ面（修正・最終版）

常陸太田ジオサイトマップについては、バンジージャンプで人気のある竜神大吊橋周辺の竜神峡や棚倉断層に内容を絞り、その成り立ちや日本列島形成との関係を地質・地形の観点から解説した。図 4 には、完成したマップのマップ面を示す。他のマップと同様にジオサイト内での見どころを竜神峡周辺の 3 つのストップとして整理し、その他の地質・地形に関する詳細な説明などは裏の解説面や QR コードとリンクした WEB サイト上に掲載することとした。

図 4：常陸太田ジオサイトマップ
・マップ面（最終版）

今年度制作した 3 つのマップは、今年度中に関係する各市町村の確認を得たうえで、印刷・配布を行う予定である。

●日立市ハイキングコースマップの設置

日立の高鈴県立自然公園内の 2 つの駐車場（向陽台・高鈴）にハイキングコースマップを載せた看板を設置するため、そのデザインの制作依頼が茨城県北ジオパーク推進協議会からあった。昨年度は、現地調査を行い、看板のデザイン案を作成した。今年度は、看板のデザインについて日立市などの関係者との打ち合わせや確認を完了し、看板の設置までを行った。図 5 に現地に設置した看板の様子を示す。日立市産業経済部や茨城県山岳連盟の関係者からは、「利用者に新たな楽しみ方を提案できるマップ」や「近年になくワクワクするマップ」と新たに地質情報を加えたことに評価いただいた。また、「プリントしたチラシが出来るといい」との意見から、看板左下に印刷したハイキングコースマップと茨城県北ジオパーク構想のパンフレットも設置した。

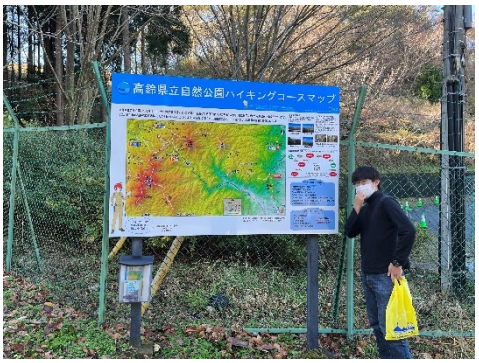

図 5：設置した日立市ハイキング
コースマップ看板（鞍掛）

●水戸市立上大野小学校での出前授業

昨年度までに、本プロジェクトでは地球科学をより身近により深く知ってもらうための活動として、教育現場である学校(特に小学校)で地球科学に触れてもらうことが重要であると考え、茨城県内に焦点を当てた地球科学の副読本の作成や地学実験動画の制作を行ってきた。これまでの活動の課題として、現場で働く教員の方々の意見・評価をいただいたり、実際に児童・生徒たちに教材を使用してもらったりすることはあまりできなかった。

そこで、本年度は茨城県北ジオパーク構

想推進協議会事務局の紹介をいただき、水戸市立上大野小学校で出前授業を行わせていただいた。小学 6 年生の学級 9 名を対象に、地震をテーマに昨年度動画を撮影した小麦粉とココア粉を用いた断層形成モデル実験の実演や地震に関するクイズ等を行った。図 6 は行った授業の様子である。授業後には参加した児童と先生方に感想についてのアンケートを実施した。児童からは、全員が地球科学に「興味を持てた」や授業に「満足できた」という感想を得られたが、クイズの難しさに関して「少し難しかった」と答えた児童が半数以上の 5 名いた（他の 4 名は「ちょうどよかった」）。先生方からは、昨年度までに作成した副読本含め目を通していただき、小学生を対象とするには少し発展的な内容も含まれていたため対象を中学生にするとよいのではないかとアドバイスいただいた。

図 6：水戸市立上大野小学校での出前授業の様子

●正断層形成モデル実験動画の撮影

動画教材作成のため、新たな実験動画撮影を行った。昨年度に行った逆断層形成実験と同じ道具を用いて、横方向ではなく上下方向の力を加えることで異なる形の断層を生じさせることができる。図 7 には、実験で生じた正断層の様子を示す。この実験の背景として、逆断層は日本のようなプレートが密集し周囲から押されるような力の場にある地域に生じやすいが、一般的には上下方向に働く重力の効果で正断層が生じやすいことが挙げられる。この実験は、地震の発生とも関連する断層が生じる仕組みについて直観的に理解できるという点で重要である。ただ、逆断層実験と比べて現れた断層が分かりにくいことや、日本での正断層型地震も逆断層型地震に比べ少ないことから、実験方法や教材としての活用方法については今後検討していく必要がある。

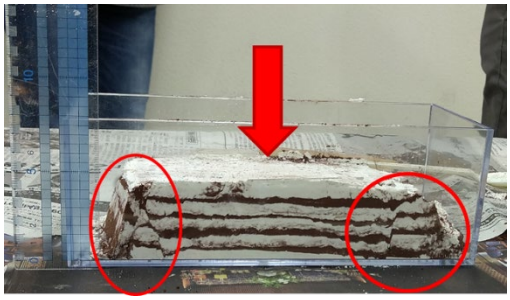

図 7：実験で生じた正断層（両端に左右にクロスする断層）の様子

●今後の課題

まず、ジオサイトマップの改訂に関しては常陸大宮地域について（株）東京地図研究社制作の地図はいただいているが、前述の理由から未完成に終わった。今後制作に取り組むにあたり、今年度末の茨城県北ジオパーク推進協議会の解散に伴い、既存の成果を含め効果的な活用方法を考え今後の連携先なども検討していく必要がある。

次に、地学の普及のための教材作成や教育実践等の活動に関しては、今年度行った出前授業といった学校や現役の教員の先生方と連携して行う活動を継続的なものにしていくことがあげられる。また、対象を小学生に絞る場合、より小学校の教育課程などを専門的に勉強している教育学部の学生からの意見等が必要だと考えられる。

●今後の展望

まず、今後の連携先についてはまだ具体的なことは決まっていないが、今後も活動を続けていくジオパークのインタープリターの方々とは積極的に関わっていきたい。また、茨城県北には地域の自然や文化などの魅力を発信して地域振興を行う活動がジオパーク以外にも存在する。そうした活動と本プロジェクトの活動との親和性を見出し、関わっていきたいとも考えている。

次に、活動の幅を広げる観点から、教育、人文社会科学といった理学以外の幅広い専門性を持った人材を集めたいと考えている。これに関しては、新入生歓迎の活動において、これまで理学部内の狭い範囲で勧誘していたものを、大学全体に広げていくことを考えている。

FES(Food Education Supporter)～食育応援隊～

代表者：農学部地域総合農学科　３年　柴田　咲季

連携先

JA 水郷つくば 阿見支店営農経済課
阿見小学校
阿見第一小学校
阿見第二小学校
本郷小学校
あさひ小学校
君原小学校
舟島小学校

顧問教員

安江 健（農学部・教授）

参加者

柴田 咲季（農学部地域総合農学科・３年）
吉富 瑠夏（農学部地域総合農学科・３年）
飯田 彩名（農学部食生命科学科・３年）
永井 幸奈（農学部食生命科学科・３年）
相馬 尚実（農学部地域総合農学科・３年）
竹中 彩（農学部地域総合農学科・３年）
長島 彩奈（農学部地域総合農学科・３年）
金子 琴音（農学部地域総合農学科・３年）
兼子 理梨（農学部地域総合農学科・２年）
渡辺 恵里花（農学部地域総合農学科・２年）
永尾 美紗登（農学部食生命科学科・４年）
杉原 ほのか（農学部地域総合農学科・４年）
石倉 未悠（農学部地域総合農学科・４年）
鬼澤 彩乃（農学部地域総合農学科・４年）
木村 玲司（農学部地域総合農学科・４年）
小林 由莉（農学部地域総合農学科・４年）
成嶋 緑（農学部地域総合農学科・４年）
堀池 志帆（農学部地域総合農学科・４年）
松浦 拓哉（農学部地域総合農学科・４年）
森山 光（農学部地域総合農学科・４年）
草谷 奈津子（農学部実践農食科学修士２年）
黒沢 まりな（農学部実践農食科学修士２年）
酒井 円香（農学部実践農食科学修士２年）
宮田 海（農学部実践農食科学修士２年）
渡邊 明花（農学部実践農食科学修士２年）

プロジェクトの概要

●背景

阿見町では、町教育委員会と JA 水郷つくばにより、町内の小学校に対し食育事業が行われていた。この活動に２０１４年度～２０１６年度までは有志の学生が自費で支援を継続し、現在まで食育事業を継続できたという背景がある。そして２０１７年度からは有志の学生が増え、更なる参画ができると考え、本プロジェクトに応募し、採択された。私たちは、主体的に小学生との交流活動を行うことで、食育活動の継続と発展を目指している。

●目的

茨城大学農学部キャンパスがある阿見町の７つの小学校で、小学生の食育活動を支援する。将来を担う子供たちの食および茨城大学、地元への関心を高めることで、阿見町の発展に貢献することを目的として活動している。

●食育への思い

私たちの活動は、実際に小学生とふれあ

いながら農業の楽しさや食の大切さを学ぶきっかけづくりが出来ることを強みとしている。

農村の高齢化・過疎化、農業の後継者不足など様々な課題が発生している中で、一人でも多くの児童に「食」や「農業」、また「阿見町」の魅力を感じてもらいたいという思いで活動している。また、小学生は未来を担う宝であり、FES の活動が将来の阿見町の活性化に繋がるということで、提携先の JA 水郷つくばの職員様や小学校の先生方も、熱意をもって協力、支援して下さっている。

●活動内容

コロナ禍前までは、小学校での主な活動として、

①授業サポート

②農業についての授業・農作業

③食に関する広報誌の作成・配布

を行っていた。

本年度は、新型コロナの影響から、

①食に関する広報誌の作成・配布

②農業についての授業・農作業サポート

を中心に活動した。

プロジェクトの成果報告

●今年度の活動および成果

①食に関する広報誌の作成・配布

FES では毎月、提携先の 7 つの小学校へ向けて「もぐもぐ通信」という題で、食や農業に関する広報誌を作成・配布し、小学校の各クラスに掲示していただいている。本誌の作成にあたっては、カラフルな色でまとめたりイラストを多用したりすることで、低学年の子供たちにも楽しく読んでもらえるように内容やデザインを工夫した。

図１：「もぐもぐ通信（2021 年 9 月号）」

本年度は、この広報誌の作成・配布が活動の中心となった。そして、この「もぐもぐ通信」を来年度以降より良いものにしていくために、以下のようなアンケートを実施し、その結果をまとめた。

〈アンケート結果（教員 16 名）〉

⑴「もぐもぐ通信」を通じて、児童の皆さんは食への興味関心が高まりましたか？（※「まん延防止等重点措置」期間中のアンケート実施により、担任の先生方による任意回答）

➡多くの先生方から、ほとんどの児童の食への興味関心が高まっていたとの回答があったが、中にはクラスの半数以上の児童が食への興味関心を実感していないという回答もあった。

⑵担任の先生からの視点で、児童の皆さんの食への興味関心は高まったと感じますか？（選択回答式）

➡９割を超える先生方から、児童の食への興味関心が高まったと感じたとの回答があった。

⑶「もぐもぐ通信」の内容で面白かったものは何ですか？（順位回答式）

➡１位　クイズ、なぞなぞ
　２位　食にまつわる豆知識
　３位　季節のイベントや行事について
クイズなどの内容が面白かったという意見が多かった。

⑷今後、「もぐもぐ通信」に取り上げて欲しい記事は何ですか？（選択回答式・複数選択可）
➡頻繁に掲載している「イベントや行事における食文化」についてのリクエストが最も多かった。その他、これまであまり掲載したことのない「食材の調理法やおいしい食べ方」や「農産物の栽培方法」についてなどのリクエストもあった。

⑸その他、「もぐもぐ通信」に対するご意見・ご要望はありますか？（自由回答）
➡“児童はもちろん、担任も大変勉強になっています。”“掲示の場所を工夫したり、子供たちに読んであげるなどアピールしたりすることを積極的に行うようにします。”といったありがたいご意見を数多くいただいた。

－アンケートの結果を踏まえて－
　面白かった内容として「クイズ、なぞなぞ」の回答が多かったことや、今後取り上げてほしい記事として、頻繁に掲載している「イベントや行事における食文化」についてのリクエストが最も多かった他、あまり掲載したことのない「食材の調理法やおいしい食べ方」や「農産物の栽培方法」についてのリクエストもあったことから、今後はイベントや行事における食文化を中心に、これまで掲載したことのない記事も掲載していこうと思う。また、低学年から高学年まで全ての児童に本誌を楽しく読んでもらえるように、引き続き、イラストを多用したりクイズを取り入れたりすることで、内容の工夫にも努めていきたい。
　さらに、“「もぐもぐ通信」の配布する時期を早めると、子供たちの食への関心がより高まりそう”というご意見をいただいたことから、来年度からは、前の月の末までに各小学校へ本誌の作成・配布が完了できるように、団体としての体制を整えていこうと思う。

②農業についての授業・農作業サポート
　提携先の JA 水郷つくばの職員様と共同で、君原小学校でのサツマイモ収穫作業のサポートや、阿見第二小学校でのレンコンの授業と茨城大学農学部の紹介などを実施した。

図２：小学校での農作業サポートの様子

図３：小学校での授業の様子

コロナ禍であることから、小学生とふれあいながら食育活動を行うことは難しくなってしまったが、小学生の真剣に授業を聞く姿や一生懸命農作業に取り組む姿を見て、さらに食育活動に励んでいきたいと感じた。

●今後の展望

今年度も昨年度に引き続きコロナ禍であったことから、直接小学生とふれあいながらの食育活動が思うように出来なかったが、来年度は新型コロナウイルス感染症の状況を見つつ、可能な限り活動の幅を広げていきたい。

また、食育活動の継続はもちろん、向上のためには周囲の方々の協力が不可欠であるため、お世話になっている方々への感謝の気持ちを忘れずに、阿見町の食育応援隊として今後も食育活動に励んでいきたい。

地域防災・活性化プロジェクト

代表者：人文社会科学部法律経済学科　3 年　川上　藍

連携先

飯富自治実践会

飯富市民センター

岩根地区会

顧問教員

伊藤　哲司

（人文社会科学部・教授）

参加者

岡田　祐輔

（人文社会科学部現代社会学科 3 年）

田澤　玲菜

（人文社会科学部現代社会学科 3 年）

矢幅　彩花

（人文社会科学部現代社会学科 3 年）

君和田　彩歩

（人文社会科学部現代社会学科 3 年）

石嶋　千恵

（人文社会科学部法律経済学科 3 年）

内桶　晴人

（人文社会科学部法律経済学科 3 年）

貞政　良

（人文社会科学部法律経済学科 3 年）

川上　藍

（人文社会科学部法律経済学科 3 年）

矢口　真衣

（人文社会科学部法律経済学科 3 年）

加茂　佐代子

（人文社会科学部法律経済学科 3 年）

中園　俊太郎

（理学部理学科 3 年）

名取　日菜

（理学部理学科 3 年）

栗原　佳宏

（理学部理学科 3 年）

那須　玄

（工学部機械システム工学科 3 年）

小川　大士

（工学部電気電子工学科 3 年）

岡野　ひなた

（工学部都市システム工学科 3 年）

山家　丈人

（工学部都市システム工学科 3 年）

舟久保　理名

（農学部食生命科学科 2 年）

野呂　永剛

（人文社会科学部法律経済学科 2 年）

福田　七海

（人文社会科学部人間文化学科 2 年）

仲村　友希

（理学部理学科 2 年）

梅澤　菜々美

（農学部食生命科学科 1 年）

林　あかり

（農学部食生命科学科 1 年）

倉田　真由佳

（農学部地域総合農学科 1 年）

鈴木　雄大

（人文社会科学部現代社会学科 1 年）

林　水人

（人文社会科学部現代社会学科 1 年）

篠原　彩

（人文社会科学部法律経済学科 1 年）

會田　力久
（人文社会科学部人間文化学科１年）
大塚　真之介
（人文社会科学部人間文化学科１年）
鈴木　千愛
（人文社会科学部人間文化学科１年）
髙橋　七央幸
（人文社会科学部人間文化学科１年）
髙橋　なつめ
（人文社会科学部人間文化学科１年）
蛇石　美里
（人文社会科学部人間文化学科１年）
松谷　晏奈
（人文社会科学部人間文化学科１年）
川上　優月
（教育学部教育実践科学コース１年）
鈴木　広樹
（教育学部国語専修１年）
五十鈴川　真惟
（理学部理学科１年）
仲村　麻衣
（理学部理学科１年）
苅込　七星
（理学部理学科１年）
生畑目　智也
（理学部理学科１年）
株木　翼
（工学部機械システム工学科１年）
嘉目　達之介
（工学部機械システム工学科１年）
熊谷　隆吾
（工学部物質科学工学科１年）
斎藤　寛人
（工学部物質科学工学科１年）
下村　愛翔
（工学部物質科学工学科１年）
鈴木　龍治
（工学部物質科学工学科１年）
松澤　勇輝
（工学部物質科学工学科１年）
髙橋　宏武
（工学部電気電子システム工学科１年）
福間　嘉衣
（工学部電気電子工学科１年）
岡本　龍馬
（工学部都市システム工学科１年）

プロジェクトの概要

私たちは、地域防災と地域活性化を目的に、2 つの活動を行った。

①体験型ワークショップ
活動日時：令和 3 年 11 月 28 日
活動場所：飯富市民センター

〇背景

飯富地区の防災研修内にて、私たち運営の体験型ワークショップを行った。防災ブック「東京防災」を参考に、限られた資源を使って、避難先で役に立つ物品を実際に作るという体験型のワークショップを行った。「備え」の大切さを学外にも伝えようと、台風 19 号の被害を受けた飯富地区を対象に企画した。

作ったものは 2 つである。1 つ目が簡易ランタンで、懐中電灯とペットボトルと水を使うことで、光が広がりやすくなる。2 つ目が簡易皿で、ポリ袋と新聞紙を使う。使用後は、ポリ袋を変えるだけで、何度でも使える。

写真 1　簡易ランタンの作り方（東京防災より）

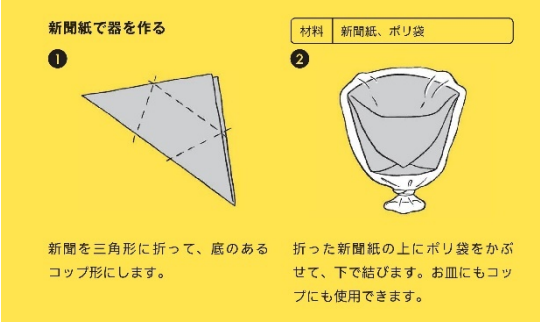

写真 2　簡易皿の作り方（東京防災より）

○目的

事前の備えをしておくことで、突然の災害にも焦ることなく対応できることを目指した。自治体による災害対策はあるものの、限界があり見落とされる部分があると考えた。そこで、東日本のボランティア経験を通して防災の備えの大切さを学んできた私たちが、被災時に役立つ物品作りを通して備えの大切さに気付いてもらおうとした。

○内容

当日は、初めにサークルの紹介や簡単な作り方の説明を行い、その後実際に物品づくりを行った。5 名ほどのグループに分かれてもらった後、学生が細かい点を教えながら作成した。

写真 3　活動の様子

②花植え活動

活動日時：令和 4 年 1 月 23 日

活動場所：岩根町山王神社

○背景

台風 19 号の被害を受けた岩根地区において、復興支援として、花壇に花を植え、人々が集える場所を作った。花壇の場所は氏子会が管理運営している山王神社で、神社内の一部に色とりどりの花を植えた。このプロジェクトは、以前から顧問の伊藤哲司先生が進めていたものであり、それに景観整備というボランティアとして関わりたいという思いから、私たちも主体的に関わった。

写真 4　山王神社内の花壇

○目的

目的は、地域活性化と地域住民と学生の交流である。地域活性化に関しては、花壇を地域住民の交流の場として使ってもらうことで、地域に活気をもたらす。散歩の途中に立ち寄ったり立ち話の場として使ったりしてもらう。地域住民と学生の交流に関しては、地域住民と学生という普段ではなかなか実現しない交流を促す。学生は現地在住の方にしか分からないその地域の良さを教えていただき、そこに住んでいると当たり前になってしまい気づかない地域の良さを学生が見つける。こうした互いにメリットとなるような交流を目指した。

写真 5　（活動の様子）

○内容

当日は、地域の方に整備してもらった花壇に、学生が花を植えた。

今後は、今回のような活動の範囲を広げていきたい。山王神社のみでなく、地域の協力を得て、地域内に花を植え、景観整備と交流の場を広げていきたい。

プロジェクトの成果報告

①体験型ワークショップ

○成果

活動を通して感じたのは、参加者が楽しく活動出来たということだ。今回の活動は、一方的に講演者が情報発信するという形式ではなく、協力しながら個人が作り方を学ぶという形式だったため、全員が主体的に参加できた点が良かったと思う。また、研修最後の講評では、地域の防災研修に学生が関わるというのは初ということで、例年にはない活動ができたというお言葉を頂いた。

○今後の展望

今後も、私たちがこれまでのボランティア活動によって得た知識や経験を地域と共有し、地域全体の防災意識向上につながればよいと感じた。

②花植え活動

○成果

花植えの成果として、地域住民の方から好評であった。また活動後に神社周辺にお住まいの方に挨拶に回った際に、快くお話を聞いてくださる方が多く、私たちも達成感を感じた。

○今後の課題

今後、持続的なプロジェクトとするために、地域住民との密な連携が必要だと感じた。例えば、花植え後の花壇を利用した交流の機会を作るなどが挙げられる。地域住民間だけでなく学生との交流も促進されればよいと感じた。

参考：東京都防災ホームページ防災ブック「東京防災」

防災ブック「東京防災」｜東京都防災ホームページ（tokyo.lg.jp）

SDGS カフェ　～地域とともに考えようひとりひとりのゴール～

代表者：茨城大学大学院人文社会科学専攻　2 年　小泉準一

連携先

常磐大学　富田敬子様

顧問教員

蓮井誠一郎（人文社会科学部・教授）

参加者

長柄　新（人文社会科学部現代社会学科　3 年）

小野　夏鈴（人文社会科学部現代社会学科　3 年）

小泉　準一（大学院人文社会科学専攻　2 年）

プロジェクトの概要

●背景

グローバル化によって国境を越えた移動や国との関わりが活発化する中で、国際社会では環境問題や貧困など様々な問題が紛糾した。2015 年には「持続可能な開発目標（SDGs）」が国連サミットで採択され、国際社会が取り組むべき課題が策定された。しかし、これらの目標は各国政府による取り組みだけでは達成は困難である。我々一人一人が SDGs を自分事としてとらえ、アクションを起こすことが求められている。このような背景から、我々は人々が SDGs について理解し、行動に移すきっかけを提供する場が必要だと考え、本プロジェクトを企画した。

●目的

本プロジェクトでは、茨城大学サザコーヒーライブラリーカフェにて、SDGs に関する講演の実施を企画した。講演の目的としては以下の三つである。

・SDGs に対する人々の理解を深める

・SDGs をより気軽に学べる機会の提供

・SDGs を通じた地域住民との交流の促進

今回の講演では常磐大学の富田学長のご協力をいただくことが出来た。富田学長はアメリカフォダム大学で博士課程を修了後、ニューヨークの国連経済社会分析局に入局し、国連経済社会局統計部次長を務めるなど、30 年に渡り国連で活躍されていた。現在は国連国際人口移動統計専門家グループのメンバーを務めており、SDGs の策定に携わった経験があることから、今回の講師として適切だと考えご依頼を行った。

図 1　SDGs カフェポスター画像

●事前活動について

定期活動として週 1 回程度のオンラインミーティングを行い、計画の策定、事務連絡、各々の進捗具合などの話し合いを行った。その後は週ごとに各タスクの割り振りを行い、資料作成や連携等の作業を進めた。また、広報活動としてサザコーヒー側はポスターの作成、学生側は Twitter での情報発信を行った。

●当日の活動について

当日の参加者にはマスク着用での参加を義務付け、受付の際には検温、アルコール消毒を徹底し、カフェ内は換気をした状態で実施を行った。講演では常磐大学の富田学長を講師として招き、蓮井学長特別補佐が進行のもと、茨城大学サザコーヒーライブラリーカフェにて約 2 時間の講演を行った。休憩時間にはサザコーヒー側の SDGs の取り組みについての解説や、SDGs に配慮した商品の提供を行った。

＜日程＞

対象：一般（定員 20 名）

日程：11 月 14 日　14:00~16:00

講師：常磐大学富田学長, 蓮井学長特別補佐（SDGs 推進）

参加費：300 円／人

プロジェクトの成果報告

●成果

新型コロナ感染防止の観点から、参加者同士が十分な距離を保てるよう定員を 20 名に絞っての開催だったが、当日は学生、社会人、主婦などの様々な属性の方に参加して頂くことが出来た。

図 2　参加者の様子

講演は「SDGs をめぐるコンセンサス・ビルディング」という題目で実施された。全体を通して富田学長の解説は非常に分かりやすく、SDGs に関する知識も多岐に渡るもので、富田学長がご経験した貴重なお話についてもお聞きすることが出来た。また、ファシリテーターを務めた蓮井先生も SDGs 推進の学長特別補佐および GREC(グレック)茨城大学地球・地域環境共創機構の機構長を務めているため、先生方の豊富な知見が相まって、より充実した内容を参加者に提供出来たのではないかと考える。

図 3 富田学長による解説

また、休憩時間ではサザコーヒーの SDGs に関する取り組みの紹介として、コーヒーとかぼちゃのプリンの提供を行った。

サザコーヒーでは形が悪いものや、傷があるものなど、市場には出せない果物を買い取り、加工してケーキやプリン、シェイクとして活用している。今回は「恋するマロン」と呼ばれる那珂かぼちゃで作られたプリンを提供した。この食品に対する参加者からの反応は好評だったため、参加者のフードロス削減の意識向上に貢献できたのではないかと考えられる。

図 4 蓮井先生による解説

●参加者アンケート結果

１．満足度

アンケート回答者 16 名のうち、10 名の方が「かなり満足」、4 名が「満足」、1 名が「やや満足」と、約 9 割の方からご好評を頂くことが出来た。

２．講演内容

公演内容は「難しかった」が 6 名、「普通」が 8 名、「少し簡単だった」が 2 名となった。「とても難しかった」と「非常に簡単だった」は共に 0 名だった。

３．もっと聞きたかった内容

「本イベントの中で盛り込んで欲しかった内容」の中では、個人で取り組める活動について盛り込んでもらいたかったとの回答が一番多かった。

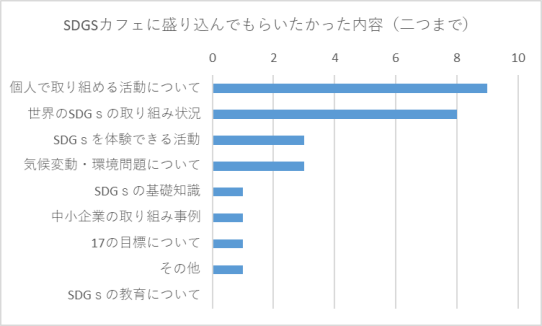

図 5 「SDGs カフェで盛り込んでもらいたかった内容」の内訳

●課題・展望

本年度は COVID-19 の影響で活動に制限があったが、無事に開催まで至った点は大きな成果だと考える。しかし、課題としては準備に対するエネルギーの省力化が挙げられる。社会連携センターからの許可が必要なものとそうでないものを一緒くたにしてしまい、やや準備に手間がかかる部分があったため、コミュニケーションコストの削減が必要だと感じた。

展望に関しては、形を少し変え、他の民間企業とコラボレーションができると良いのではないかと考えている。身近なカフェという空間で SDGs について学べるイベントは新しい試みであるため、他方にも広げていきたい。また、今回の運営メンバーが所属しているゼミを通じて、来年度への運営の引継ぎを検討している。来年度も開催する場合は、今回のアンケート結果を踏まえ、更にカジュアルなイベントに仕上げたいと考えている。

あみ自然大好きプロジェクト

～地域とつながり環境と未来を考える～

代表者：農学部地域総合農学科　3 年　染谷　海

連携先

阿見町・町民生活部・生活環境課
小笠原　浩二　様
村上　馨　様
豊崎　郁子　様

顧問教員

小松崎　将一(農学部・教授)

参加者

染谷　海(農学部地域総合農学科・3 年)
江寺　巧(農学部地域総合農学科・3 年)
佐藤　里桜(農学部地域総合農学科・3 年)
井上　渉(農学部地域総合農学科・3 年)
深澤　茉那(農学部地域総合農学科・3 年)

プロジェクトの概要

●背景

令和 3(2021)年に第 2 次阿見町環境基本計画が策定された。その中で、自然の大切さや人との関わりを普及するための取り組みとして「あみ自然大好きプロジェクト」が進められている。町民にこうした取り組みの輪を広げていくことが課題となっている。この課題解決のため、本プロジェクトを実施した。

阿見町では、うら谷津自然観察会などを毎年開催し、子どもや町民に自然観察とふれあい体験などを行なっている。また、霞ヶ浦清掃大作戦やクリーン作戦などの開催によって町民の環境活動と交流の促進を図っている。

●目的

本プロジェクトは、阿見町で活動している環境団体の方々と連携し、環境や地域の未来について考え、若い人など活動を知らない方々に活動を知ってもらうことを目的として行った。

●プロジェクトの実施過程

2021 年 10 月 6 日に学生の参加者が集まり、阿見町で行われている自然大好きプロジェクトの状況について顧問教員から説明を受けた。その際、あみ自然大好きプロジェクトの認知度が低いこと、若い年代の方の参加が少ないことなどの問題が挙げられた。そこで、学生たちで打ち合わせをして地域連携プロジェクトの申請の可能性について検討した。

10 月 13 日には、学生たちでプロジェクトの申請計画を策定した。ここでは、ワークショップの開催を行い、あみ自然大好きプロジェクトを学生に周知することを提案した。また、連携先として、阿見町町民生活部生活環境課に依頼し、小笠原課長から、阿見町環境基本計画について説明を受け、阿見町における町民が行っている環境保全活動の内容について学習した。そこで、阿見町では「神田池を保全する会」や「うら谷津再生の会」、「実穀近隣公園ほたる野会」などといった団体の活動が行われていることを情報共

有した。
以上の取り組みから、学生の意見として、「阿見町の現在の状況について知る事ができたとともに、今後私たち自身もこのような活動に関われたらよいと考えた。」、「阿見の自然大好きプロジェクトの活動について知ることができたとともに、さらなる情報の収集と発信を進めることが必要だと考えた。」、「阿見町の環境保全活動について知ることができ、地域の方々と協力してこのような活動について広めていきたいと考えた。」などが寄せられ、コロナ禍の中で地域との連携について中々考えられなかったが、阿見町役場の話を聞いて町民における環境保全活動について学ぶことができた。

図 1　連携先の方々との打ち合わせの様子

●「学生が取り組む『あみの自然 大好きプロジェクト』～地域とつながり環境と未来を考えるワークショップ～」の開催
12 月 8 日に、ワークショップの開催にあたってプログラムを作成した。開会のあいさつや基調講演および町民の方々の活動について、どのような報告が良いのか検討した。また、ワークショップ周知用のポスター作成を開始し、ポスターのデザインや申し込み方法などについて打ち合わせを行った。
さらに、町民の方々の活動については 4 人の方から以下の表題について報告を行っていただくこととした。
①稲川　雅信「阿見町の植物の保全活動から」
②吉田　幸二「NPO 水辺基盤協会の取り組み」
③山﨑　友美子「あみの食の現場から」
④栗原　友香「親子自然体験クラブ森のきのこの取り組み」
この 4 つの報告依頼を、阿見町役場を通じて行うこととした。また基調講演として、ゼロカーボンシティ宣言に関する取り組みについて報告いただくよう、学生が茨城大学の教員に依頼することとした。
12 月 15 日に、学生と役場の職員が参加のもとに最終的にポスターの確認を行い、修正事項を取りまとめた。また、zoom を利用したオンライン開催の実施方法について打ち合わせを行った。
12 月 23 日にはポスターを完成させ、その後、学生や地域連携課および阿見町役場に周知した。阿見町役場では、役場の HP に掲載され町民に周知を行うことができた。
1 月 25 日に、オンライン開催のワークショップのリハーサルを行った。ここでは、学生は自宅から、阿見町役場では役場の会議室からアクセスしリハーサルを実施した。
1 月 29 日に、ワークショップを下記プログラムのとおり開催し、参加者は 41 人であった。

図 2　ワークショップ周知用ポスター

●プログラム

9:50 開場

10:00 開会 進行：学生

あいさつ 阿見町長：千葉 繁

10:10 基調講演 地域環境がカギを握るカーボン・ニュートラル 茨城大学学長特別補佐(ＳＤＧｓ推進)：蓮井 誠一郎

10:40 町の活動団体等からの発表

「阿見町の植物の保全活動から」 阿見町環境基本計画推進委員：稲川 雅信

「NPO 水辺環境基盤協会の取り組み」 〃 ：吉田 幸二

「あみの食の現場から」 〃 ：山﨑 友美子

「親子自然体験クラブ森のきのこの取り組み」 〃 ：栗原 友香

11:40 意見交換 進行：学生と阿見町

11:55 閉会あいさつ 阿見町環境基本計画推進委員：川畑 秀慈

●阿見の食育に関する動画の作成

11 月 17 日に、ワークショップの打ち合わせの際に阿見町の環境保全活動に関する動画作成について、依頼を受けた。学生で話し合った結果、阿見町の農業と環境に関する動画の作成について検討することとなった。動画の内容としては、①地域の農産物、②阿見の農業の生産構造の変化、③阿見町における有機農業、④阿見町のフードロス、⑤阿見の食、⑥農業体験　の 6 つである。

これらについて取りまとめる担当を決めた。12 月 22 日に、関連する写真やデータを持ち寄り、動画作成の素案を作成した。動画作成については、プロジェクト期間中には完成できなかったため今後検討する。

プロジェクトの成果報告

●プロジェクトの成果報告

ワークショップを実施して、参加者からは以下の意見が寄せられた。

「この度は有意義なワークショップを企画・推進下さり有難うございます。良いワークショップであったと思います。町民の一人として嬉しく思います。学生の方々が真摯に取り組む姿に感じ入りました。彼等彼女らにとって得難い経験であろうと思うと同時に、地域が若い人に期待しても裏切られないだろうと感じました。また、テーマの大きさを考えると単発で済むものではなく、継続することも重要と考えます。」

この意見を受けて、本ワークショップの開催によって、町民の方々に期待を寄せていただけたことを嬉しく思うと同時に、今後も活動を継続していくことが重要となるこ

とを実感した。

また、プロジェクトに参加した学生からは、「今回のような経験は自分にとって初めてであり不安もあったが、色々な意見を聴くことができとても有意義な時間となった。」、「ワークショップを通して、自然の大切さについて改めて考えることができ、農学部学生という環境を利用するものとして意識的に環境保全に取り組んでいかなければいけないと感じた。」、「環境団体の方からお話を伺い、地域で実際に取り組まれていることや地域の自然環境について学ぶことができた。今後、阿見の自然環境を保護していくためには、私たちのような若い世代の取り組みも重要になっていることを改めて実感した。」、「ワークショップが開催されるまでは、阿見町ではどのような環境に関わる活動が行われているのか知らなかったため、これについていろいろと勉強になるところが数多くあった。今回のワークショップを踏まえて、持続可能な社会の在り方について考えていきたい」などの感想が寄せられた。

また、ワークショップでの活動内容を雑誌Basser(バサー)に掲載していただいた。こちらの記事では、本ワークショップでNPO水辺基盤協会の活動についてご発表いただいた吉田幸二様が、ワークショップ全体の概要とご自身の感想を述べられている。

図 3　雑誌 Basser での掲載ページ

●成果のまとめと今後の展望

ワークショップを開催したことで、阿見町の環境と未来について考える機会を多くの人に提供できた。また学生だけでなく町民の参加者もおり、『あみの自然大好きプロジェクト』の取り組みの輪を広げることに貢献できたと考える。加えて、身近な環境問題について我々学生ができることを考えるきっかけになった。活動をより多くの人に知ってもらうために、今後も引き続き活動を継続していくことが必要となると考える。参加者数はまだまだ増加の余地があるため、次に開催する時は周知方法を工夫したい。

動画作成に関しては、関連する写真やデータを持ち寄り、動画の素案を作成した。しかし、プロジェクト期間中には動画を完成できなかった。コロナ禍のため思うように活動を進めることが難しいが、今後は動画の完成を検討していきたい。

茨城大学社会連携センター
Ibaraki University Social Collaboration Center

問合せ先
国立大学法人茨城大学 社会連携センター
（研究・社会連携部社会連携課）
〒310-8512　茨城県水戸市文京2-1-1
TEL：029-228-8585
FAX：029-228-8495
E-mail：renkei@ml.ibaraki.ac.jp